書評論文

中村友里愛

書誌情報

日本国際政治学会編『国際政治』第173号「戦後イギリス外交の多元重層化」（2013年6月）
君塚直隆「エリザベス二世と戦後イギリス外交ーガーター勲章と王室外交の意味」

論文内容

本論文は、第二次世界大戦以降、エリザベス二世が行った外交について概観している。特に、ガーター勲章をめぐる各国との微妙な関係について、エリザベス二世の王室外交に対する思惑が描写されている。

本稿の序章である「日英王室外交の再開と昭和天皇のブルーリボン」では、1970年代初頭に日本とイギリスの王室外交が再開された経緯が詳細に述べられている。

第二次世界大戦後の日英関係は冷え込んでいた。1951年のサンフランシスコ講和条約後も捕虜虐待問題などから関係改善は進まなかったが、1952年にエリザベス二世が即位し、1953年6月の戴冠式に皇太子明仁が出席したことが、戦後の日英王室外交の第一歩となった。1970年10月、日本の駐英大使・湯川盛夫が外務事務次官グリーンヒルを訪れ、1971年秋に天皇・皇后の訪英を提案した。これに対し、イギリス側は前向きに検討を開始。エドワード・ヒース首相は日本との経済関係強化を望んでおり、東京駐在のピルチャー大使も天皇の訪英が大きなインパクトを与えると助言した。1971年の訪英を優先するため、他の予定が調整され、女王は昭和天皇をバッキンガム宮殿で迎えることを決定した。天皇のガーター勲章の復活が懸案となったが、イギリス外務省と王室が協議し、復活が認められた。エリザベス女王は、祖父ジョージ五世から授与されたガーター勲章を復活させる意向を持ち、天皇のブルーリボンを再び認めることを決定した。1971年10月5日、昭和天皇・皇后はガトウィック空港に到着。エリザベス女王やヒース首相らに迎えられ、バッキンガム宮殿へ向かい、盛大な晩餐会が開かれた。天皇はガーター勲章を着用し、その様子は『タイムズ』に写真付きで掲載された。天皇訪英中にはロンドン市長主催の晩餐会や日本大使公邸での答礼晩餐会が催され、訪英は成功裏に終わった。しかし、反対意見も存在し、一部の抗議行動も見られた。

この訪英は、日英間の友好関係再構築に大きな役割を果たし、エリザベス女王の決断は伝統と先例を重んじつつ、戦後の恩讐を乗り越えた両国の関係改善に繋がった。特に、昭和天皇がイギリスのエリザベス女王からブルーリボン勲章を受章したことが強調されている。日英同盟この受章を通じて両国の王室間のつながりが強化され、外交関係の改善に寄与したとされている。このような王室外交の再開と昭和天皇のブルーリボン受章は、日英両国の歴史的な関係において重要な出来事であった。

続く第2章「イラン国王との確執」では、1970年代初頭にイギリスとイランの関係が緊張していた背景が述べられている。
ヴィクトリア女王時代の大英帝国は、非キリスト教徒の王侯にガーター勲章を授与し、広範な権益を維持していた。しかし、第二次世界大戦後、イギリスの国際的地位が低下し、冷戦の中でアジア諸国の元首に配慮する必要が出てきた。その中の一人がイラン国王モハンマド・レザー・パフラヴィーである。彼の父はナチス・ドイツに接近し、1941年にイギリスとソ連の侵攻を受け失脚。モハンマド・レザーはその後、イギリスとアメリカの支援を受け、権力を維持した。イギリスにとってイランは重要な石油資源供給国であり、1951年のモサデク首相による石油産業の国有化宣言後、イギリスとアメリカは国王と協力してモサデク政権を倒した。1956年のスエズ危機でイギリスの中東での威信が低下すると、反共主義を掲げるパフラヴィー国王の重要性が増した。イラン、イラク、パキスタンとイギリスはMETO（中東条約機構）を結成したが、国王はイギリスが十分にイランの協力を評価していないと感じていた。1959年5月、パフラヴィー国王の公式訪問が決まり、彼はガーター勲章を望んだが、先例がないとして拒否された。代わりに、イギリス空軍大将の称号が授与された。1961年、エリザベス女王がイランを訪問し、友好的な関係を築いたが、その後、国王の要求は増し、1962年には非公式訪問の際に女王との夕食を強要した。1970年、パフラヴィー国王はペルシャ帝国建国2500周年記念式典への女王の出席を要請したが、拒否された。代わりに、エディンバラ公とアン王女が代理で出席。豪華な式典が行われたが、国内の貧困問題が顕著になり、1979年の革命で国王は失脚し、1980年に亡命先のエジプトで死亡。彼は生涯ブルーリボンを身に着けることはなかった。

第3章の「タイ国王との複雑な関係」では、エリザベス2世がガーター勲章の授与を巡って微妙な関係であったのはイスラーム教徒であるパフラヴィー王朝のイラン国王だけではなく、仏教徒であるラッタナコーシン王朝のタイ国王とも微妙な関係であったことを述べている。
エリザベス2世がガーター勲章の授与を巡って微妙な関係であったのは、イスラーム教徒であるパフラヴィー王朝のイラン国王だけではなく、より長く複雑な関係が続いたのが、熱心な仏教徒であるラッタナコーシン王朝のタイ国王だった。そして共産主義勢力が東南アジア全体に波及するのを防ぐために、米英はタイと協力関係を築いたのである。その後、女王はシンガポールとマレーシアを訪問する運びとなり、タイにも12年ぶりに公式に訪れる手はずが整った。
そして、先に見たイラン国王の事例と同じようにこたびもガーター勲章をあたえないかわりにラーマ9世にはイギリス空将大将の称号を与えるという打診がなされたのだが国王はそれを拒否したのである。それから、エリザベス2世は再びタイを公式に訪れた。しかし、ブルーリボンは持参されなかった。2006年6月ラーマ国王は在位六十周年記念式典を国民と盛大に祝い、イギリスからは女王の名代として次男アンドリュー王子が出席した。スペインからはソフィア王妃が出席し、同国最高位でガーター勲章に次ぐ伝統を誇る金羊毛勲章をお祝いにと持参した。しかし、エリザベス2世はアンドリューに何も託さなかった。その返礼であろうかエリザベス2世はタイを訪れたヨーロッパ君主の中で唯一一人ラーチャミトラーポーン勲章を授与されていない。

本稿の終盤では、ガーター勲章の歴史の中で一度剥奪された名誉が回復したのは後にも先にもこの昭和天皇だけであるということが述べられている。
1998年5月に明治天皇と美智子皇后は即位後初めてのイギリス公式訪問を行った。明治天皇はエリザベス2世からブルーリボンを新たに授与された。そして、ガーター勲章の歴史の中で一度剥奪された名誉が回復したのは後にも先にもこの昭和天皇の事例だけである。

今後の展望

・このような政治に関するものではなく、エリザベス二世の性格や心境・心情の変化についての情報を整理したい。

・ダイアナ妃の葬儀のとき、王室とは関係ないものとして扱うと、冷たい態度をとっていたエリザベス二世だったが、国民（世論）の反発に押される形で、葬儀は正式に執り行われた。
→その際のエリザベスの心境はどのようなものだったのか明らかにしたい。

・エリザベス2世の心境を知るために、朝日新聞や読売新聞などのデジタル記事から過去の新聞を抜き取り、あらゆる関係する記事を見つけ、分析していきたい。
・エリザベス2世本人やエリザベス2世の親戚などの日記があれば、よく読み、心境について分析していきたい。